

産業化の夢

「飲食業を水商売ではなく産業にする」ことを志に掲げた私は、その実現に向けての第一歩として、まず日本興業銀行から融資を受けたいと思った。日本

私の履歴書

江頭 匡一
えがしら きょういち

⑬

三千億円にすぎなかった。そのときに、「日本の飲食業というのは将来、必ず産業化し、国民生活の向上に役立つようになり

あなたでも相当なことをやれるかもしれない」
早速、興銀はスタッフをわが社の調査に派遣したり、飲食業の将来を検討した。本社の役員会でも厳しい意見が相次いだ。そ

しかし、「飲食業＝水商売」という考えが根深く、普通銀行がほとんど関心を示さない時代。興銀の壁は想像通り厚い。「飲食業の産業化なんて」と苦笑する支店長もいた。興銀通い

実となった。いわば恩人ともいえる村瀬氏だが、それからずっと後、私が会長職を退任して、創業者に就任したとき、わざわざお祝いに来られた。村瀬氏は、金一封を差し出し、「よくやりました」とおほめの言葉を私にかけてくれた。産業化を実現し

がほとんど関心を示さない時代。興銀の壁は想像通り厚い。「飲食業の産業化なんて」と苦笑する支店長もいた。興銀通い

それを毎年、この冊子を発行したが、ある年、松下幸之助氏が、これを評価し、「日本で最高の経営理念をもっている会社は松下電器産業とロイヤルだ」と言われたという。そしてロイヤルの株を個人で二十万株ももっていたいたり、小冊子を五十冊ずつ二回ほど求められたりもした。

興銀を説得、融資獲得

経営理念に幸之助氏の賛辞

経済に役立つ産業を育てることこそ、戦後復興で大きな役割を果たした興銀の使命ではないかと考えたからである。

市内の料亭にはかま姿で来られた村瀬氏は、私の話をじっと聞かただけ聞いて立ち上がった。そして帰り際、玄関のところで、ふと上を向きながらこう言った。「飲食業には人材が少ない。

たごほうびだと思って、この祝いは大切にしまっておく。この興銀融資が決まる三年前の六四年に、ロイヤルという会社を広く知ってもらおうと、小冊子「ロイヤルを知っていたために」の発行を始めた。創業時、二百人あまりだった従業員も、そのころには六百人

そう心に決めるや六〇年代初めから興銀の福岡支店に足しげく通った。今でこそ約三十兆円の市場規模に成長した外食産業だが、当時の飲食業界はおよそ

興銀からの融資で、産業化への力ギを握るセントラルキッチン（集中調理工場）の建設が現

を越え、店舗数も二十三になっていた。冊子のなかで私は、日本もいずれ自動車が急速に普及し、高速道路や通信網が欧米並みに発展していくと予測。その流れのなかでロイヤルをどういうふうに育てたい、と将来に向けての指針を書いた。



村瀬元興銀支店長（前列右）らと筆者（同中央）

だが、当時の飲食業界はおよそ

た。「飲食業には人材が少ない。

（ロイヤル創業者取締役）